

## 16) ゴンズイ＝権萃

ゴンズイはミツバウツギ科の落葉小高木で、関東以西の山野に自生する。葉は 5～9 枚の小葉からなる奇数羽状複葉で、小葉は縁に鋸歯がある卵形をしている。初夏、枝先に淡黄緑色の 5 弁花が集まって咲く。果実は秋に熟すと裂けて中から黒い種子が露出する。和名の由来はいくつかあり、第一の説は「呉茱萸」(ゴシュユ=01-04-04 参照)に由来し、古くは「コニスイ」と記したが、これが訛ってゴンズイになったという説である。第二の説は果実が熟して老化する様や、腋臭のような臭気を天人の「五衰」に見立てて、「五瑞」の文字を当て、これが転訛したとする説である。「五衰」とは天人が死ぬときに現れるとされる、五つの衰えの姿のことで、まず最初に頭上の冠または花が萎れて、次いで腋に汗が流れて、さらに衣服が汚れて、続いて体が臭くなり、最後に座にすることを楽しまなくなる、と言うものである。これを音の近い「五瑞」としたわけである。第三の説は漢字の権萃は単なる当て字で、もとは「樗」の文字を当てて[cho]と発音し、ゴンズイを意味すると同時に役に立たないものをも意味していた。このため同じく役に立たない魚のゴンズイを当てたとする説である。しかし魚のゴンズイは『権瑞』の文字を当てており、食用になる。

一方、荘子の著した『逍遙遊』編には「吾は大樹に有りて、人は之を樗と謂う。」と記されており、一方、同じ荘子の『人間世』編には同じく役に立たない「櫟社の木」の話が記されている。このため「樗櫟」(チョレキ)と謂う言葉が生まれ、その意味は、ともに材としての使い道がなく、役に立たない木なので切る人もなく、どんどん繁って大きくなる。転じて役に立たないものの例えとして用いられるようになった。「櫟樗」(レキチョ)ともいい、同じ意味である。要はゴンズイは役に立たない木の代表と見なされてきたわけである。別称としてはキツネノチャブクロ、クロクサギ、ハゼナ、などがある。学名は『*Euscaphis japonica*』で、属名は美しい槲果を意味している。

一方、中国では「野鴉椿」と呼ばれ、鴉はカラスのことで黒い種子を例えたのだろう。椿という字は中国では「椿事」など変わった出来事に、「椿寿」として長生きに用いるが、この場合は椿の木にどこか似ているためにつけられたのだろうか。さてもともとの『権萃』だが、『権』は以前は木の名前を現したが、後に秤の分銅を現すようになり、分銅の軽重を支配するために権威になったものだという。他方『萃』は草むらの意で、ゴンズイの木に関わる文字は何もなく、当て字と言われる所以でもある。ゴンズイの若芽は食用になるものの、材は臭気があり薪材以外、役に立たない。

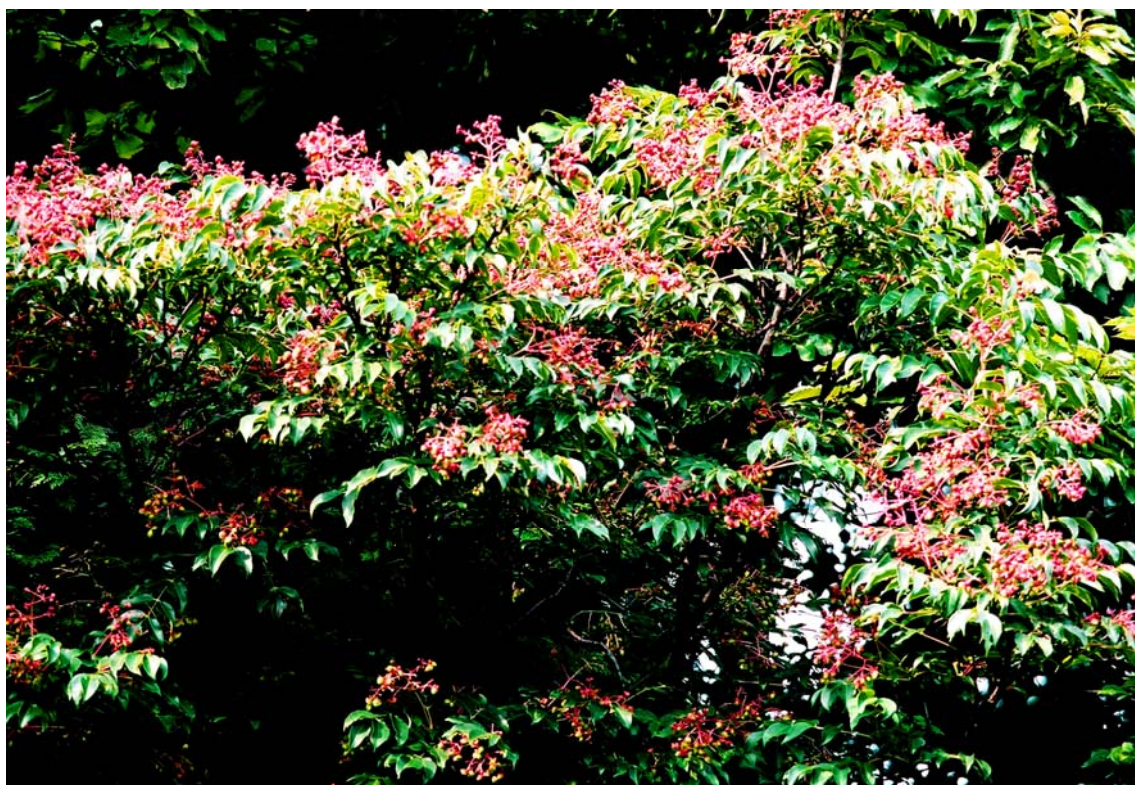
ところで明治時代の文芸評論家でもあり小説家でもあった高山樗牛は、この荘子の『逍遙遊』に、雅号『樗牛』のヒントを得たもので、仙台第二高校時代から用いていたと言う。1900年美学研究のため夏目漱石らと共に海外留学が決まっていたが、洋行の送別会後に咯血し留学を辞退、1902年神奈川県平塚市の杏雲堂平塚病院で31歳の若さで12月24日に死去した。遺言により静岡市清水区の『龍華寺』に葬られている。



ゴンズイの若い果実。雑木林の中や林縁などで茂っているため、この花に気づく人は、まずいない。しかし白い花が散って、果実が実るところになると本領を発揮する(埼玉県深谷市)。



ゴンズイの果実は赤い花のようだがこれは果皮で、雑木林の中でよく目立つ(さいたま市桜区)。



鈴生りになったゴンズイ。材としてはほとんど何の役にも立たないゴンズイだが、秋になると、この赤い果皮ゆえに一時の安らぎを与えてくれる(埼玉県朝霞市)。



果実から種子がはじけ出る。赤いのが果皮で、黒いのが種子(埼玉県上尾市)。

[目次に戻る](#)